

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520081

研究課題名（和文）日本における言語実践の通世代的伝達に関する精神分析的研究—文字と語
らいの諸相研究課題名（英文）Psychoanalytic Study of the Transmission of Language Practice through
Generations in Japan - Aspects of Letters and Discourse

研究代表者

新宮 一成（SHINGU KAZUSHIGE）

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：20144404

研究成果の概要（和文）：文化の構造は、人から人へと世代を超えて伝えられる。伝わってくる文化に対してどのような態度を取るかは、それぞれの世代の自覚的な責任において決定される。しかしながら、文化が人間に与える心情的効果は決して一義的ではないがゆえに、文化は人を迷わせ苦しめる。本研究では、この苦悩が、言語活動の実践に内在する決定不能性や多義性という構造的な要因に由来するという作業仮説を立て、精神病理、民俗、芸術の各分野を調査した。その結果、この不可避な決定不能性を受容しかつ変容させるために、特異的な精神の諸活動が機能していることを把握することができた。

研究成果の概要（英文）：Cultural structure is transmitted from generation to generation through personal contacts. It is up to each generation to be more or less aware of the responsibility for this transmission. The emotional effect of this transmission, however, is not univocal, and leads people astray and gives them sufferings. In this research, we made a hypothesis that these sufferings stem from the structural incompleteness that is inherent to language practice. Then we investigated into psychopathological, ethnological and artistic fields for this factor, and, as a result, grasped specific forms of psychical activity functioning in order to accept and transform this unavoidable incompleteness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・比較思想史

キーワード：精神分析、阿闍世、折口信夫、民俗学、森鷗外、三島由紀夫、親子関係、リチュ
ラテール

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本における伝承の危機が叫ばれて久しいが、近年ではそれは狭い意味での文化の継承の問題だけではなく、里山など生存環境の継承の危機としても強く意識されるようになった。この危機意識と、新しい時代に即応せねばならぬという必要性との間で、現代社会は葛藤している。
- (2) 精神分析的経験の中では、親の意志の継承という問題は、激しい情動的葛藤の源泉となり、神経症を引き起こす。近年では親の意志それ自体が多義的であり、文化の時代的変遷の中で揺れ動いている。したがって神経症の原因となる親子の意志の情動的葛藤は文化危機の状況と結合している。
- (3) 言語実践の伝達は、意味がそのままに受け取られるか拒否されるかという形では進まず、むしろ構造的な非決定性と多義性をどのように変容させていくかということを目指して進められていく。その点に鑑みると、上記の社会的かつ情動的な葛藤の解決の試みが、文化の諸領域における業績として残され、その解決の困難は神経症の症状の意味として残されていることが見出されるという見通しが立てられる。

2. 研究の目的

- (1) 文化の諸領域において、伝達に際しての多義性をめぐる葛藤を見出し、その止揚の形式の内部から、自己治癒的側面を導き出すこと。
- (2) 神経症的苦悩の裡に無意識的に孕まれる通世代的伝達の困難の所在を、精神分析的観点から明らかにし、翻って通世代的伝達の本質的な両義性の構造を、諸領域の文化的達成の分析を通じて捉え返すこと。

3. 研究の方法

- (1) 言語活動の実践の幾つかの領域と、通世代的伝達の多義性の幾つかの表現型を指標として立てる。言語活動の実践の領域としては、日本における民俗、文学、神経症症状に狙いを絞る。伝達の多義性の表現型としては、語らいと文字の間の相克や相補関係を軸とし、その派生的表現としての、内と外、愛と憎などの両面的な構造に着目する。
- (2) 民俗の領域においては、日本が外来文化

の到来に晒された時期に、日本的秩序と生産を精神的に支えた民俗活動に着目し、その活動を記録し考察した折口信夫の業績を取り上げる。折口は民俗の活動を言語活動の実践の有りようという点から考えたフィールドワーカーにして理論家であった。

- (3) 文学の領域においては、精神分析という語らいの方法が、文学という文字の実践においてどのように日本で受け入れられたかを調べる。語るということは精神に変容をもたらす。通世代的な伝達としての語りが存在するという点を精神分析という方法論が拾い上げたが、そのことを文学者が日本で文字を介した通世代的言語活動としてどう概念化したかを調査する。視点として、精神分析家ジャック・ラカンが、日本の文字を参照しつつ提出した「リチュラテル」という概念を活用する。この概念は、「知る」という精神活動と「存在を楽しむ」という全体的活動との間には、陸と海の間にある砂浜のような間隙があるということを目指して調査する。文学における語りと文字との間の非両立性と一体性の矛盾した両面を、この概念を梃子にして明確化する。
- (4) 神経症症状の領域においては、高名なエディプスコンプレックスの概念が、すでに愛と憎の両価性を構成要素の一つとしていることに着目する。このコンプレックスは一つ上の世代との欲動の関係のあり方の範例として作られている。したがって神経症の症状は、一個人が上の世代との関係を辛うじて保つという意味を有する。このエディプスコンプレックスは、それ自身として通世代的に伝達されていくものである。非常に古い時代から、各文化を横断しつつ、このコンプレックスの構造がどのように形を変えながら受け継がれていったかを調査する。

4. 研究成果

- (1) 上記の各領域において、非決定性や多義性の標識となるものを探索し、具体的に捉え、定式化した。
- (2) 日本の民俗において伝えられているものについて、折口が着目したように、祭の論理構造を取り上げた。愛知県の山間部（奥三河）に残された花祭りへと、採訪旅行を行い、その記録を参照しながら、折口の著作を読み返し、その理論の再検討を行った。その結果、次の重要な2点

が取り出された。まず、祭の起動力として、「内と外」という構造的対立がある。「伝承」は一見すると、一貫して「内」において「内」を守るために行われるべきものであるかのように見えるが、実は必然的に「外」との関係を保つことに腐心しているのである。祭では、折口の言うまれびとの概念が形象化されている。当該の祭では、「鬼」の巨大な存在感の中にこの関係が認められた。この「内と外」の対立の中には伝承が有する多義性の標識が明らかに認められる。そして次に、このような外との関係を演じ、形象化するに当たって、言語という概念の本質的な重要性が現れることが指摘できる。すなわち、祭は、構造的な「内と外」の対立の中で、「みこと」という特異な境位を有する言語的要素が、受け渡されるという実践なのである。祭はこのように、構造的対立の中での言語的運動なのである。こう考えることにより、なにゆえに折口が、民俗の研究において突き止められる重要なものに「言語伝承」という名を与えていたかが明らかになった。しばしば誤解されがちのように、それは語源的な思弁的理論ではなく、一つのきわめて具体的な実践活動の構造を表す用語なのである。そこには文字のみならず声がこの構造の保存に関与している。このことに関連して、中世の歴史的文書に関する講演を酒井紀美氏に依頼し、古文書の内でもまた、声という位相をできるだけそのままに保存しようとする意志が働いていることを確認できた。

- (3) 文学においては、精神分析における人間の自己認識を日本文学がどのように取り入れたかを歴史的に調査した。精神分析における「内面を語り出す」という言語実践の形は、治療学的にはまずは「原因を語り出す」という意味で捉えられる。しかしながら、この「原因を語り出す」ことは、「過去にこうであったから現在がこうである」という、存在についての因果論的認識そのものである。したがってここには人間の行為に、さらには人間が存在しているということそのものに原因はあるのかという自己意識の問いがある。すなわち文学は、書かれたものという「結果」において、書いている自己という「原因」の存在を肯定し確認することができるかどうかという挑戦である。この挑戦の中で、書かれたものの中に「声」がそれとして記録されているときは、それは書いている主体を特に指し示すものとしての意味を持ちうる。文学として書かれたものは虚構であるが、

書いている主体は現実である。両者の間の反立的二重性は、伝承されるべき文化の多義性の標識の一つと考えられる。この二重性をかえって活力として生かすのが文学であるとしても、その生かし方を見出すまでには困難な道程がある。そこに精神分析の語りの発想を適用するかどうかは、文学者の興味の対象になりうる。このたびの調査では、2点においてこの問題への文学者の態度決定が分かれた。一つは自己を性的産物であると考えるか、逆にアブリオリに存在しているものと措定するかという反立である。精神分析によるヒステリーの病因論においてはこの反立が患者の苦悩として捉えられているが、鵑外は性的原因を否定する一方で性的な実験小説を書き、佐藤春夫はむしろ性的病因説を小説の中で積極的に試している。第二には、文学は自己をありのままに書くべきかそうではないのかという反立的問題がある。いわゆる自然主義では前者の立場が擁護される。漱石門下で後に精神医学者となった中村古峯は、弟の精神病を自然主義的に描写し、そして弟の「声」を作中に保存するような形式を持った作品で成功を収めながらも、文学者としては挫折した。しかし三島由紀夫は、文学者として成功しながらも言葉の虚構性に身を固めてそれに殉じる道を選んでいる。文学という「書かれたもの」の中で、作家の存在という「書いているもの」を捉えて確立することは極めて困難であると言える。ラカンが「リチュラテル」で示したように、「書く主体」は、文学における「知」と「享楽」の間で、砂浜の文字のように現前するにすぎないという反立的な多義性に、規定されている。文学者の陥る主体性の困難は、この規定に由来するものである。

- (4) 神経症の症状という領域においては、通代的伝達における多義性の標識は、「象徴」という姿をとって極めて先鋭的に現れる。ちょうど夢において「象徴」が現れたときに、夢を見た人がその「意味」が理解できないのと同じように、「症状」が現れたときに患者はその「意味」を理解できない。症状も、象徴の一つの形であって、同じように、「世界において広く知られているにもかかわらず、それが個人を襲ったときには、個人はその意味を知ることができない」という両面的な性質を持っているのである。そして「象徴」は、それぞれの文化の重みを担い、世代的に受け継がれ、習俗のうちで頻々と活用されているものである点から、夢においても症状においても、人は

象徴による通代的伝承を無意識のうちに行っていると捉えることが可能である。このことから考えると、夢においてきわめてしばしば死者が蘇ることがよく理解できる。症状もまた、精神分析においてしばしば見いだされるように、死んだもの、あるいは幻想のなかで死んで行ったものと主体との関係から、作り出されるのである。ここには、生と死という反立を多義性によって扱う想像界の特徴と、知っている状態と知らない状態の両方を個人において成り立たせる象徴の反立的特質とが表現されている。精神療法においては、この象徴をどのように作動させるかということが治療の方向性を決めるのである。象徴の作動の領域は、死者と生者をもとに包含している。人々は象徴を用いて、死者との交流を行うための様々な様式を確立してきたのである。エディプスコンプレクスは、この際に個別に人々の心的生活と広い象徴作用との相互関係を作る働きをしてきた。経典を含む古い文献から歴史的に確認できるように、エディプスコンプレクスは、必ずしも解決されて消えるというわけではなく、症状と象徴との間の媒介として機能しながら、形を変えているいろいろな物語の中で受け継がれてきているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- (1) 新田篤:「森鷗外によるフロイトの神経症論への言及」、『精神医学史研究』13(2): 115-124, 2009.
- (2) Kazushige Shingu: Oedipus and the Other in Japan. *Annual Review of Critical Psychology*, 7: 277-285, 2009.
- (3) Maria Lucia Correa: El acto según Mishima: entre la escritura y el cuerpo. *Desde el Jardín de Freud Revista de Psicoanálisis*, 9: 209-221, 2009.
- (4) Maria Lucia Correa: Mishima and a literature of the body. *Proceedings of the 25th International Conference on Literature and Psychoanalysis*, 67-76, 2009.
- (5) 牧瀬英幹:「集団的創造力と病理」-「鯨絵」の生成と主体の再構成を巡る問題」、『日本病跡学雑誌』79:81-90, 2010.
- (6) 牧瀬英幹:「描画・夢・症状」、『臨床描画研究』25:146-160, 2010.
- (7) 新宮一成:「精神療法についての構造論的な考察」、『臨床精神病理』32(2): 129-139,

2011.

- (8) 新田篤・新宮一成:「中村古峡『殻』における統合失調症の描写とエピソードグラフィ」、『日本病跡学会誌』79:38-52, 2011.
- (9) Kazushige Shingu: The Creation of the Other World: From Dream to Reality. *Journal of the Centre for Freudian Analysis and Research*, 21:15-28, 2011.
- (10) 牧瀬英幹:「『絵解き』の技と喪の病理-熊野比丘尼の『絵解き』における妊娠・出産に纏わる対象喪失の問題-」、『日本病跡学会誌』(印刷中)
- (11) 岡安裕介「折口信夫の言語伝承考」『記号学研究』(印刷中)

[学会発表] (計 7 件)

- (1) 岡安裕介:「民俗学から古代研究へ 柳田一折口思想の展開」、日本思想史学会、2009年10月18日、東北大学文学研究棟 仙台市.
- (2) 牧瀬英幹:「作品構成の変遷と病理-時代の転換期における芳年の憂鬱-」、日本病跡学会、2009年6月12日名古屋大学東山キャンパス 名古屋市.
- (3) 新田篤:中村古峡『殻』とエピソードグラフィ. 日本病跡学会. 2009年6月12日、名古屋大学東山キャンパス 名古屋市.
- (4) 新田篤:内田百閒「山高帽子」とエピソードグラフィ. 日本病跡学会、2010年4月23日、長野県佐久勤労者福祉センター 佐久市.
- (5) 新宮一成:精神療法についての構造論的な考察. 日本精神病理・精神療学会、2010年10月8日、東洋大学白山キャンパス 東京都.
- (6) 牧瀬英幹:「性関係」と描画. 日本描画テスト・描画療学会、2010年10月24日、香川県県民ホール 高松市.
- (7) 新田篤:佐藤春夫「更生記」における精神分析と精神病学. 日本精神医学史学会、2011年10月29日、愛知県立大学長久手キャンパス 長久手市.

[図書] (計 1 件)

- (1) Cornyetz, N. and Vincent, J.K. (eds.): *Perversion and Modern Japan: Psychoanalysis, literature, culture*. Pp. 261-271, Shingu, K.: Freud, Lacan and Japan. Routledge, 2010.

[その他]

- (1) 平成 21~23 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書『日本における言語実践の通代的伝達に関する精神分析的研究-文字と語らいの諸相』平成

24年2月20日発行。(第一部 民俗と伝承、第二部 文学と伝承、第三部 象徴と伝承、第四部 臨床における伝承、全180頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新宮 一成 (SHINGU KAZUSHIGE)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：20144404

研究協力者

岡安 裕介 (OKAYASU YUSUKE)

牧瀬 英幹 (MAKISE HIDEMOTO)

マリア・ルシア・コレア (MARIA LUCIA KORREA)

新田 篤 (NITTA ATSUSHI)

(以上の研究協力者の所属：京都大学大学院人間・環境学研究科 共生人間学専攻 博士後期課程)